

Q 5 学級や学年の他の児童生徒への指導における留意点は何ですか。

A 5 不登校等の児童生徒のトラブルや学習困難は、本人自身の課題への取組だけでなく、学級や学年の他の児童生徒の理解を促す指導や、同様な課題のある児童生徒との関係への配慮を踏まえた指導も大切な取組です。

トラブルやからかいの問題での学級指導(1) 事例1 A男

(低学年) 学級児童に対して、学習不振やトラブルの背景として、LDかもしれないことも踏まえて(LDである、と説明するのではなく)、
A男がわざとトラブルを起こすのではないこと
みんなと仲良くしたい気持ちをもっていること
を説明し、理解を促す。しかし、幼い傾向のある児童とはトラブルが続く。
(高学年) A男のかん高い声へのからかいの問題で、担任による学級指導実施。
いろいろな声の人がいること、彼の声は個性であること
彼の行動が迷惑なこともあるが、仲良くしたい願いをもっていることを説明する。その後、欠席が減少した。

トラブルやからかいの問題での学級指導(2) 事例6 F男

学級全体またはトラブルの相手生徒に、タイミングに留意しながら、次のようなことについて理解を求めることを続けた。
周囲のことが気になりやすいので、自分をコントロールしにくいこと
挑発やちょっかいをかけるようなかわり方をすると、F男を乗せてしまい悪循環になること
F男も成長しようと努力していること

同調する他の児童への指導 事例2 B男

B男の欠席が続き、同調してトラブルを起こしていた児童が少し安定した。時々登校するB男と、彼らが距離を置くようになったので、B男が疎外感をもったり、学級での居場所を失った感じをもたないように、双方への指導を実施した。

他の別室登校児童との関係にも配慮 事例3 C子

他の不登校児童の性格や課題にも留意し、プレイセラピーにおいても児童どうしのかかわりを無理に設定せず、教師との遊びや別の場所での遊びなど、居場所づくりを柔軟に考えた。

相談部と担任、学年主任、養護教諭等他の分掌との連携 事例9 I男

教室登校を目指し、学級の受け入れ基盤を固めるため、I男の様子を説明したり、授業・行事への誘いかけを計画的に行う。そのために相談部が担任、学年主任、養護教諭等と十分な連携を図った。

教室登校実現後、担任が特別視しないかわり 事例3 C子

教室登校ができるようになって、心理的不安が残っていると考え、いわゆる「腫れ物」にさわるとかかわると、かえって心理的負担になる。また、幼い傾向にある児童生徒の反発を招くおそれもあるので、特別視しないかわりに留意した。